

エッセイ

私の中の同志社

まさひと
広瀬方人

(長崎の証言の会運営委員、1952年大学文学部卒業)

一 予科入学のころ

一九四七（昭和二十二）年四月、日本の敗戦からわずか一年七カ月後。夜行列車で二十二時間かけて京都に着いた。原爆で灰色一色になった長崎の町から来た私の目には、京都の町は美しかった。

大学予科一年B組、関西出身が多く、みんな長髪の髪をポマードでなでつけていた。九州出身の私は当然のように坊主頭。クラスで坊主頭は榊原胖夫君（現同志社大学名誉教授）と二人だけだった。私の下宿が彼の寺と近いこともあってすぐ彼と親しくなり、しばしば一緒に歩いて帰った。彼は「南無阿弥陀仏の南無とは……」と私にはよくわからない話を熱心に話した。私はもっぱら聞き役で長崎の田舎から出てきた少年の目には彼はひどく大人びて見えた。食糧難の時代で米の配給通帳を持ってこなければ米の配給が受けられない時代だったが、どんなに腹が減っても平和はよかった。

その年の十一月三日、リユニオンが今出川校地で行われた。戦後初のリユニオン。湯浅八郎先生の総長就任の祝賀が行われた。戦時中アメリカに亡命しておられたと聞いた。軍国主義体制に抗して亡命されるとはすごい方だと思っただけ、挨拶された総長は温厚そうで拍子抜けした。「亡命中、日本語を使わなかったの、日本語がたどたどしいのだ」と同志社中学出身の同級生が言った。

予科では予科長の山田先生の講義があった。同志社の創立者新島襄先生の生い立ち、エピソード、そしてその思想について学んだ。正門の前まで行って、「良心之全身ニ充滿シタル丈夫

ノ起り来ラン事ヲ」の碑を示しながらのお話もあった。新島先生が自らの腕を叩き、熊本バンドの学生を諫めて、三つに折れたという杖の前で、強い感銘を受けた。

二 朝鮮戦争勃発まで

翌一九四八（昭和二十三）年四月、学制の改革で予科廃止、新制大学一年に編入、教養課程二年、専門課程二年を過ごすことになった。

私が在学したこの五年間は軍国主義日本の解体に始まり、まもなく米ソ対立の中で日本が反共の防波堤へと変貌させられた疾風怒濤の時代であった。

つい半年前まで、現人神であった天皇の人間宣言につづいて、教育基本法の公布、日本国憲法の戦争放棄と教育勅語の廃止、そして一九四八年の暮れには極東軍事裁判で戦犯二十五人に有罪判決、そのうち東条英機ら七人の絞首刑が執行された。一方、占領下の日本で民主化を進めていた米国は、ソ連を中心とした共産主義の脅威に対抗して、日本における占領政策の見直しを始めた。A級戦犯七人の死刑執行直後、岸信介らA級戦犯十九人が釈放された。

一九四九（昭和二十四）年になると、当時最も力のあった国鉄労組の組合潰しが始まり、次々に奇怪な事件が起こった。下山国鉄総裁の轢死、三鷹車庫での列車暴走、松川事件、そしていずれの事件も、国鉄労組幹部のしわざとして労組幹部が逮捕され、国鉄労組の人員整理反対闘争はその勢いをつぶされた。

一九五〇年に入ると、占領軍総司令官マッカーサー元帥が

「日本国憲法は自衛権を否定しない」と言明、六月に共産党中央委員全員の追放を指令し、その直後の六月二十五日、朝鮮戦争が勃発した。日本国憲法も言論の自由も、米ソ対立の世界戦略の中で翻弄されることになり、それは近年まで続くことになった。

三 歴史学研究会と朝鮮戦争勃発

新制大学の教養課程は人文・社会・自然科学の中からそれぞれ二科目を選択することになっていた。この中に今津晃先生の歴史学があった。歴史学専攻をめざしていた池本幸三君（現龍谷大学名誉教授）の呼びかけで新たに歴史学研究会が誕生した。榊原君や原田亨君（同志社大学商学部事務室元事務長）もいた。それぞれが課題を与えられて発表会を開いた。私は例えば「The Basis of Soviet Strength」という本を読んでその内容を発表した。今津先生のお宅にもおじゃまして勉強した。歴史を学んで日本の未来像を描いた。デモクラシーという新しい思想をどのように日本の国に定着させるかを模索した。夢と希望を抱いていた。当然、占領政策の転換には敏感であった。そこへ朝鮮戦争が始まった。マッカーサー総司令官は吉田首相あての書簡で国家警察予備隊の創設を指令した。日本における軍隊の復活であった。

四 「平和に生きる会」発足

朝鮮戦争勃発から間もなくの七月初め、歴研のメンバーから

「和田洋一先生のところ遊びに行こう！」と誘いがあつた。私はフランス語だったけれど一緒に下鴨の先生のお宅におじゃました。

いろいろおしゃべりをしたあと、帰り際に先生が例の調子でぼそつとつぶやかれた。「戦争が始まったけれど君たち、なにもしなくていいの？」

先生のお宅を出ると、すぐに議論が始まった。

「おれたち何もしなくていいのか！」

「何もしないでいいはずがない！」

「何をするんだ？」

「平和を守る会を作ろう！」

興奮してしゃべりながら五人のメンバーが西陣の池本君の自宅にそのまま行つた。その夜のうちに、平和を守る会の発足を決めた。会の名称はそのころ上映されて評判のよかつたイタリアンリアリズム映画「平和に生きる」からとつた。

「平和に生きる会」の発足と入会呼びかけのビラをその夜のうちに作り、B4用紙五百枚を四つ折にして二千枚を刷つた。池本君の家のガリ版と手刷りの印刷機を使わせてもらった。夜中に下宿に帰り、翌朝八時、ビラを配るために校門前に集まつた。せつかく終わつた戦争をまた始めさせてなるものかという思いがあつた。

十月になって人民中国義勇軍が朝鮮戦争に加わり、国連軍は釜山の一角に追い詰められた。そして十一月末、米国のトルーマン大統領が「朝鮮戦争において原爆の使用もありうる」と発言した。

それを聞いたときのショックは今も忘れない。たつた一発で、

七万以上の人が殺され廃虚となつた長崎の原子野を思い浮かべた。遺体も見つからなかつた従兄の顔を思い出した。朝鮮でまたあの長崎の惨劇が繰り返されてはならないと思つた。

五 「平和に生きる会」の活動と世界で初めての原爆展

平和に生きる会では学内で「平和と民主主義」をテーマに講演会を開催、住谷悦治先生や田畑忍先生、岡本清一先生らに講師をお願いした。一方、私は原爆展を学内でやろうと考えた。

三月の初め二十二時間かけて長崎へ帰つた。そして駅からそのまま市長さんの自宅へ向かつた。玄関に出て来られた奥さんに「長崎県人会長」の名刺を出して用向きを伝えると、やがて応接室に招じ入れられた。

私は市長に訴えた。「京都では長崎の原爆のことを誰も知りません。小規模でもまず学内で原爆展をやりたい。ついでには長崎の原爆の資料をぜひお貸し願いたい」。市長は私の言うことを黙って聞いておられたが「いいでしょう。明日、係のものをやるから爆心地の資料小屋の前で待っていてください」と言われた。

翌朝爆心地へ行くと、板囲いの小屋があつた。現在、浦上天主堂の煉瓦の遺跡が建っている前のあたりである。係の職員が無造作に板戸を開くと、中には溶けたガラス瓶や瓦のかけらなどが山のように積まれていた。それらの被爆した瓦の下で幾万の人が亡くなつたかと思つて胸が詰まつた。

四月の初め、長崎市から大学に資料が届いた。展示は徳照館の階段を上がつて右側の二部屋を借りた。平和に生きる会のメ

ンバーと一緒に長崎の被害地図を作った。被害地図から紙テープを引つ張り、紙テープの先に爆心からの距離に従って、溶けたガラス瓶や瓦などを並べた。六月十四日から一週間だったと思う。

このあと京都大学同学会が大掛りな原爆展を開催した。その規模の大きさに私は目を見張ったが、今振り返ってみると、同志社での原爆展はささやかだが、世界で初めての原爆展であった。

六 原爆投下目標都市であった京都

一九五二年三月、私は大学を卒業して長崎に帰った。ようやく占領は終わろうとしていたが、被爆体験を公に話したり出版することは、占領軍によって厳しく監視されていた。被爆者が生き残っていることさえ多くの人は知らなかった。米占領軍は原爆の被害を隠し、被害をなるべく小さく見せようとした。

被爆者の存在がようやく世間に知られるようになったのは、一九五四年三月一日の米国によるビキニ水爆実験からである。日本のマグロ漁船「第五福竜丸」が死の灰をかぶり、そして南太平洋で捕獲されたマグロから多量の放射能が検出されて日本中が大騒ぎになった。私は、ケガもヤケドもしていなかったのに、帰って来ない息子を探して爆心地に入り、一週間後に高熱と鼻血、枕カバーにべつとりと抜けた髪の毛を残して死んだ伯母の姿を思い出した。伯母は放射能障害で死んだのだった。

こうして五六年八月長崎で第二回原水禁世界大会が開かれた。私はその頃長崎県高等学校教職員組合の書記次長をしてい

たが、原水禁世界大会の事務局次長として大会の運営にあたった。それ以来被爆者の仲間とともに核兵器廃絶の運動を続けてきた。私たちは「米国に原爆が投下されて、米国の人が原爆を体験してみればいい」と思ったことも言ったことも決してない。ただひたすら「核兵器は二度と使われてはならない兵器だ。長崎を最後の被爆地にするために世界の平和を望む人たちは手をつなごう」と訴えてきた。一九八二年からは長崎に来る修学旅行生に被爆遺構を案内しながら体験を伝える運動を始めた。毎年七十校あまり、一万数千人の生徒たちに体験を伝えている。

この間公開された資料で、京都が原爆投下の目標都市になっていたことを知った。一九四五年の三月、第一回「原爆投下目標都市選定会議」で「まだ空襲を受けていない都市の中で原爆の効果が測りやすい都市」として新潟・京都・広島・小倉の四都市が決められた。原爆投下は初めから実験設備のいらない大きな実験として意図されていたのである。そのあとスチムスン陸軍長官の反対で京都がはずされた。しかし原爆の製造・投下など全ての計画を推進してきたグロブス准将は最後まで京都への投下にこだわり、トルーマン大統領に京都への原爆投下を直訴している。京都と新潟が目標都市からはずされたとき、長崎が予備の都市として加えられた。そして第二発目の原爆が投下されるはずであった小倉も投下を免れて長崎に投下されることになったのである。京都の同志社に学んだ私は、京都と長崎の不思議な運命を感じつつけている。そして、私の生涯の原点である被爆体験を貫き通す気力を与えてくれたのは、「良心之全身ニ充満シタル丈夫」たらんことを教えてくださった諸先生方と友人そして被爆者の仲間である。